

水産生物 稚魚への影響

宮古湾

岩手県宮古湾奥部の環境は、今までの調査結果から稚魚の生息に適していることが明らかになってきましたが、今回の津波は宮古湾奥部の稚魚の成育場にも大きな被害を出したと考えられました。そこで、地びき網による調査を行い、稚魚の生息状況を調べ、2010年の結果と比較しました。

11年6月の調査の結果、10年6

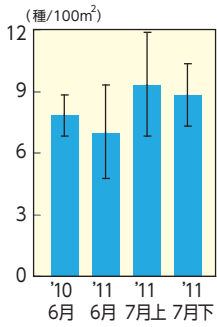


図2. 宮古湾の稚魚の種数

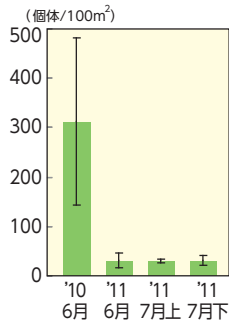


図1. 宮古湾の稚魚の生息密度

月に比較して小型のハゼの仲間であるニクハゼなど稚魚の生息密度は減少していました(図1)。一方、

3月が産卵期であったアイナメ、マコガレイ、ニシンなどの稚魚が採集でき、種数に大きな変化はありませんでした(図2)。また、毎月調査した結果、7月には4〜6月が産卵期のクロダイ、ウミタナゴ、クロソイなどの稚魚も採集され、11年の12月までの調査で50種類以上の魚が確認できました。

以上のことから、宮古湾では津波によりニクハゼなどの数が減少する被害を受けたものの、3月の震災以降に産まれた魚は育っていることから、湾内の稚魚の成育場は大きな影響を受けていないことが推察されました。今後も、成育場の稚魚の季節変化や、生息環境の回復過程などを調べるため、定期的に調査を実施する予定です。

仙台湾

津波の影響で、仙台湾の海底の状態が変化し、ヒラメ稚魚が生息できる環境が破壊されたのではないかと心配されました。そこでまず、ヒラ

メ稚魚が生息する水深10メートル付近の底質と餌を調べた結果、以前と同様に、仙台湾の西部の七北田川河口(阿武隈川河口は海底が砂地で、稚魚の餌となるアミ類が多く生息していることがわかりました。次に、

02年から継続的に調査している名取



写真1. 2011年8月27日に水深12メートルで採集されたヒラメ稚魚



写真2. ヒラメ稚魚の胃内容物アミ類を大量に摂餌していました

川河口(仙台湾空港の6〜15メートルの水深がある地点で、8〜12月にかけて定期的にヒラメ稚魚と餌を採集し、食性と成長を調べました。

その結果、ヒラメ稚魚は非常に多く、過去10年間で3番目に高い水準でした(写真1)。胃の中を調べると、主食であるアミ類や魚のシラスをたくさん食べていました(写真2)。また、成長も良好でした。

以上のことから、仙台湾西部海域は、震災前と変わらず、ヒラメ稚魚の良好な成育場であることが確認できました。今後も、ヒラメ稚魚以外の魚を含めて、この海域の成育場としての質・量の変化と役割を、注意深く調べていきます。